

- (1) 単元名 : 「虹の足」 吉野弘
 (2) 本時の目標 : 抽象的な語句に注意しながら、主題について、知識や体験と関連づけて自分の考えを持つ

すばらしい公開授業になった。新年度に入り、赴任してきた先生方にとっては「学びの共同体」に対する期待と不安が入り交じっている時期である。前年度に計画されていた校内研修授業を国頭中で3年目になるベテランの S 先生が快く引き受けてくれた。前年5月に佐藤学先生を招聘しての公開授業においても焦点授業を行った実績十分の先生である。

百聞は一見にしかず。「学びの共同体の理念」に基づくスタンダードな授業を初めて目の当たりにした先生方も多かったであろう。しかし、この授業で大まかなイメージがつかめたのではないだろうか。さらに、授業後のリフレクションにおいては、新任の先生方が生徒の固有名をあげ、どこで『学び』がうまれたのか、どこで躓いたのかをしっかりと語り合っていた姿には驚かされた。(本当にすごいことです!)

14:45 ~ 【おちついた雰囲気で授業がスタート】



おちついた雰囲気ですべて授業がスタート。題材は吉野弘の抽象的な表現の多い「虹の足」である。

対象学級は2年B組、小学校の頃から「学び共同体」の理念による授業を受けており、最もスタイルが定着している学年ともいわれている。

授業者が導入で様々な「あ」の文字を板書し、「なんて読むの?」と問いかけながら発声させていく。同じ文字なのにその書き方一つで子ども達の声量やトーンが変わっていく様子がなんともおもしろい・・・、不思議である。



(授業者の意図された何気ない問いかけに子ども達がどんどん引き込まれていく)



隙間のない男女の机

14:49 【日常が見える】

導入から4分後、退屈しない、間延びしない絶妙のタイミングで課題がおろされた。基礎・基本の「朗読」である。ボソボソと自分のペースで読んでいく・・・。

グループを形成するときもスムーズに進行する。学習形態の「定着」を感じた一コマであった。机と机に隙間がないことから、互いに支え合う支持的風土が見て取れる。



机と机に障壁(カバン等)がない

【教師のポジショニング】



ともすると、教師は強い使命感から机間指導をするなかで、「わからないところはないねー」、「ここは大丈夫ねー」などと、つい教えたがる。しかし、このような行為は、子ども達が悩みながら課題を解決するチャンスを摘み取る(学びを切る)ことになる。

授業者は常に学びから逸れていく子どもを把握し支援しなければならない。そのために S 先生のようにどっしりと身構え全体を冷静に見渡す必要がある。

教師の仕事は課題をおろし、「聴く・つなぐ・戻す」そして「ケアする」に徹すること。そして「気づく・考える」生徒を育成していくことにある。



【深い読み: テキストとの対話】

14:57 ～ 【発表する友達に体を向けて、目で、心で、「聴く」】



A 班のグループ全員での朗読が始まった。聴く側の生徒の体が自然に発表(朗読)する生徒の方を向いている。学びの作法の一つ『発表する友達に「体を向けて」、「目で」、「心で」で聴く』の実践である。朗読する側も朗読をさせられている義務感はない。当たり前のように静かに淡々と授業が進んでいく・・・。

【支持的風土が漂う授業】



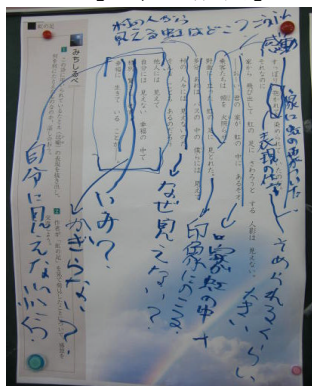
【生徒の「虹の足」のイメージ画】
Y さんの描いた画。イメージを具体化させることによって、生徒の思考を見取ることができる。



(「後ろの人も見えるように」自然な配慮がある)

「ちょっと、見えない人は前においで・・・」。生徒の描いた「虹の足」を提示し、やさしい語り口で授業者が語りかける。「なに？、なに？」、「あっ、あれは〇〇のだ！」と口にながら生徒が自然に集う。それぞれが自由に場所を確保し、自由な姿勢で黒板を見つめる。他の中学校では見られない、なんともいえない心地よい雰囲気教室を包み込んでいく。

【生徒の疑問】



全体でのすり合わせをするときに気をつけたいのは、生徒の意見や答えを羅列するだけに終始してしまうことである。意見や答えを述べ合うだけでは「学び合い」にはならない。授業者が「どこでそう思ったの」、「これに対してどう思うの」、「じゃあ、もっとこれを考えてみよう」などと、つなぐ、戻す作業が校種、学年、教科等に関係なく重要である。授業者は、交流の場面で生徒の意見に「へえ〜」、「あ〜そう」、「なるほどねえ」と共感しながら多様な意見を引き出し、状態を把握していた。

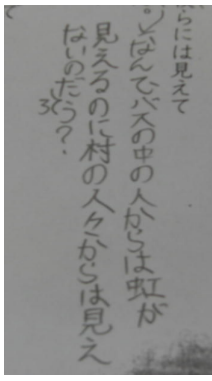
15:18 ～ ①【読みを深める】



②【足場を組んであげる】



③【Y さんの疑問】



①佐藤雅彰は『中学校における対話と協同』において、国語におけるジャンプは「教材の中の言葉をジャンプ課題として読み深める」としている。「作者が伝えたかったことは？」の問いに全員がテキストに視線を移す。個人差はあるもののみんな一生懸命に思考している、この一連の流れをすべて生徒に波及し、充実させていきたい。
②数分後、躓いている生徒へのケアが入る。どうしても自分(教師)が求めている模範解答へ誘導(ヒントを与える)しがちだが、ここでは最低限の支援のみであった！
③比較的勉強が得意でない Y 君の教科書。抽象的な表現に対する彼なりの「疑問」がしっかりと記されている！！

15:27 ～ 授業者の「目に見えない幸せって?」、「見える幸せって?」の問い多くの生徒が答えられない、じゃあ考えてごらん・・・。オープンエンドで淡々と授業は終わっていった。次時でさらにケアされ、どのような答えが出てきたのか興味がある。(思考を重視する授業では、必ずしも明確な答えは必要ではない)

4 月 4 日に村内の教職員を対象に「学びの共同体」の理論研修を行った。新任の職員にとっては不安だらけのスタートだったと思います(私も同感)。その中で先頭に立って授業公開をしてくれた S 先生本当にありがとうございました。リフレクションで新任職員から固有名が出た瞬間に「国中がさらに発展する」と感じました。職員の同僚性があれば授業も充実する!、これからも自信を持って進めていって下さい。 渡慶次

